

第15期 第3回小平市緑化推進委員会 会議要旨

- 開催日時 平成29年1月16日（月）午後6時30分～午後8時30分
- 開催場所 小平市役所 6階 601会議室
- 出席者 椎名委員長、山田副委員長、市川委員、信山委員、田中委員、白井委員
加藤委員、菊地委員、小林委員、棚井委員、千葉委員、西成委員（順不同）
- 傍聴人 なし
- 議題 (1) 第15期小平市緑化推進委員会の検討課題について
(2) その他

会議の要旨

委員長

今回の委員会までは、各委員から自由に意見を出していただき、次回からそれをもとにした提言書の土台の審議を行うような工程で進めたい。

委員

年末年始に玉川上水緑道を歩いていた際に、鎌倉橋から小川橋あたりの緑道にあるゴミ集積所にゴミが大量にあるのが気になった。ボランティアの方が掃除をされた落ち葉が大半であり、その周りの緑道の落ち葉は非常にきれいになっているので、ありがたいと思う反面、景観上何とかならないものか。また、小平市では平成31年からゴミの有料化、戸別回収を始める予定だということだが、こうした問題の解消など、まちの美化につながるような方法を検討してほしい。

委員

ゴミの集積所はおそらく自治会が中心となって決めているので、市が介入しづらいのではないかと。また、回収日以外に出されたゴミが緑道に残されているというような状況もよく目にするので、戸別回収だけで全て解決というようにはいかないだろう。

委員長

玉川上水緑道沿いに集積所があることで、落ち葉を集めていただいている方もいると思われるので、そういった方との関係を崩すということは良くない。うまく協力関係を続けていけるような方法を検討する必要があるだろう。

委員

落ち葉については、市民からの苦情も多いかと思われるが、市と都で対策を協議する場などは設けられているか。

事務局

対策について連絡を取り合うということはあるが、会議というような場は設けていない。落ち葉の清掃については自治会単位でやっていただいている部分があるので、そうした方々に、ゴミ袋を支給するというようなことは行っている。

委員

落ち葉については有効資源として活用できる。放射性物質による汚染の問題もあるが、私が測っている中では、震災当時より線量は落ちており、小平市の場合は基準値以下になっている。

委員

玉川上水の緑道の地面が固くなってきてつまづくことが多くなった。前に玉川上水緑道でウッドチップを敷いていたことがあったが、最近は見なくなった。歩きやすかったのも、またやってみてみてはどうか。

委員

15年くらい前に貫井橋から喜平橋の間で撒かれていた。撒いた当初はクッション性が良く、2年くらい経つと土のようになって歩きやすかったが、それ以降やっているのを見たことはない。

事務局

小平市が管理している区間についてはゴムチップ舗装を行っている箇所が多い。また、剪定枝を利用したウッドチップについては、放射能の問題があり利用が難しい部分がある。

委員

確かに玉川上水の右岸でウッドチップを撒いていたことがあったが、柔らかくて歩きやすいという意見もある半面、女性からはパンプスではとても歩けないということで、非常に不評であった。

委員長

ウッドチップについては、ナラタケモドキなどの菌を持っていることがあるので、緑道などに撒く場合には出どころなどに注意を払わなければならない。チップを撒く

かどうかという話であれば、自然の状態が良いのか、歩きやすいように整備された状態が良いのかという問題に突き当たる。ぬかるんだ状態であっても、それが良いという考えもあるだろうし、通勤・通学などの生活圏となっている箇所では舗装の必要性もあるだろう。箇所ごとに適した方法を考えなくてはならない。

委員

小・中学校での入学や卒業の際に記念植樹をしてはどうか。名木百選には学校の樹木が載っていないが、将来立派な名木になるような木を植えるということをやってみてはどうか。

委員

学校の樹木でも名木百選に登録されているものが何本かあるので、そうした取組もすでにされているのではないか。

事務局

学校ではすでにそうした取組をされているところもあるが、土地の広さに制限もあるので毎年やるということは難しい。

委員

小学校では、木が大きくなって手に負えなくなっているという現状もある。隣地の住宅に接触してしまったり、台風で木が折れたりしたりしても、なかなか切ってもらえないということがあった。

委員

学校の緑は、緑が減少しているという昨今の中では非常に貴重であるが、現状、十分な手入れがされていない。環境教育の観点からも、身近にある学校の緑がより価値を持つような方法を検討すべき。私立の学校では樹木の管理が十分にされている。小平市でも学校の緑について重要という位置づけをして、方針を定めて管理を行ってほしい。

委員長

津田塾大学は府中街道を挟んだ向かいにある樹林を買収した。これは学校のイメージとしてその樹林を重要なものとして捉えたためということであった。樹林で行っている隣地から5メートルの樹木の伐採ということを学校でも実施すれば、相隣関係の問題についてはなくなるだろう。

委員

学校に関しては高木化の問題があるとするならば、屋上緑化や校庭芝生化をしてはどうか。

事務局

校庭芝生化に関しては、小平第十三小学校において行っているが、維持管理を行うボランティアや予算の面から、現状他の学校では行っていない。

委員

十三小の方からは、芝生の管理についてとにかく大変だと聞いている。

委員長

校庭の芝生管理は大変だとは思いますが、それでも継続して維持されているからには、その取組に賛同されている方も多くいるということだろう。

委員

提言としてまとめるにあたっては、「住み続けたいまち」であるとか、切り口をどうするかということを考えなくてはならない。

委員長

そういった題目はすでに出揃っていると思うが、そのレシピを詰めていかななくてはならないだろう。

委員

前回の会議の内容を受けて考えたが、「思いやり」と「人に優しい」ということが基本姿勢として必要だろう。そのためには樹木などを通して春夏秋冬を感じられるようにするなど、人と人との有機的なつながり、いわゆるコミュニティの再生のきっかけが必要になるだろう。

委員長

先ほどの校庭の芝生を管理するボランティアもおそらく、そこにコミュニティが出来上がっているのだろう。記念植樹であれば、それもある意味縦系列のコミュニティと言えるかもしれない。そのような緑を介した地域コミュニティ機能の増進という考え方もいいかもしれない。

ムーちゃん広場は地産地消の推進に寄与したか。農家にとって農業で生計を立てられるかどうかということは、生産緑地が守られるかということにもつながる。

事務局

ムーちゃん広場に品物を出している農家の数は、当初に比べ十倍に増えており、売り上げも伸びている。商品について一定の品質を確保するよう指導を行ったことが、よりよい地産地消の形につながった。

委員長

地産地消の中身を考えていかななくてはならない。プチ田舎を掲げるのであれば、景色もあるが自給率が高くないといけないと考える。そのためには、相続税の問題はあるものの、ムーちゃん広場、直売所、体験農園などといった農家が経済採算をとれるような枠組みが必要になる。都市農地というのはそれ自体が魅力にもなるので大事にしなければならない。

委員

農業で収益を上げるためには、規模の大きな農地が必要になるのではないか。

事務局

体験農園は1反あたりの収益を上げるためという側面もあり、体験農園での1反あたりの収益は水田や農地に比べても大きい。市内には5反の農地で1億円を売り上げるような農家もあるので、収益の大小は経営方法によるところも大きい。

委員

小平市のブルーベリーの収穫量はどれくらいあるか。

事務局

20トン程であるが、減少傾向にある。

委員

ブルーベリープリンやスムージーなどが学校給食で出されている。

委員

小平市にはブルーベリーを使った商品などがあるかと思うが、小平市の方で何か協力をしているのか。

事務局

小平ブルーベリー協議会という市内の生産者団体や事業者が参加する協議会があり、そちらに協力を行っている。

委員長

これまでの話を踏まえ、プチ田舎の中身を追及するという方向で考えたい。先ほど話のあった「思いやり」や「人に優しい」というようなことを柱にして、最終的には住みたくなるまちということにつながるようにまとめていきたい。

以上